

祐徳稻荷に参拝し，呼子朝市を散策し， 唐津くんちを満喫する

— 映像メディアの広告効果と訪日タイ人の観光行動 —¹⁾

片山隆裕

1. はじめに

2013年7月に，訪日し短期滞在（15日以内）するタイ人とマレーシア人への観光ビザ取得が免除される措置がとられた。新成長戦略の柱の1つとして「観光立国」を掲げる日本政府は，経済成長を続けるアジア圏の中でも，特に近年，中間層の所得が急速に増加し，成長を続けるタイとマレーシアからの観光客に増やしたいという狙いがあるとの措置とされる。タイ人の訪日観光客数を他のアジア主要国からの観光客数と比較してみると，2012年時点では年間約26万人と，韓国（約157万人），台湾（約133万人）など比べると，決して多いとは言えなかった。韓国，台湾からの観光客数はさらに増加傾向にあるが，他方，中国からの観光客数は尖閣諸島領有権問題などの影響を受け，減少傾向にある。しかしながら，2013年以降のタイからの観光客が大きく増加し，ビザの免除措置がとられてからは，45万人（2013年），65.8万人（2014年），77.7万人（2015年）と，年々着実に急増している。

このほかにも，訪日タイ人観光客急増の理由としては，もともと親日国である上に，バンコクを中心としてタイ国内にさまざまな日本文化があふれていること，日本関係のイベントが頻繁に開催されていること，日本・タイの航空便の増便など，様々な理由が考えられる。中でも「一生行くことがないであろう

県全国1位」(マイナビフレッシューズ)の佐賀県へのタイ人観光客の急増ぶりは、全国平均の増加率をはるかにしのいでおり、300人(2013年)、1480人(2014年)、5180人(2015年)と急増している。

では、なぜ今、「はなわさんの歌以外に思いつくものがない」(男性23歳)、「アクセスが悪いので、旅行先として選びにくい」(女性26歳)、「九州地方に行くとしたら、他の県が優先になる」(男性35歳)などと評される佐賀県²⁾にタイ人観光客が急増しているのだろうか?本稿では、そうした訪日タイ人の増加を、ミクロな視点から九州の佐賀県に絞って考察し、佐賀を訪れるタイ人観光客が急増した理由として、タイ映画・ドラマというコンテンツの広告効果について検討することを目的としている。まず初めに、近年におけるコンテンツツーリズムとフィルムツーリズムの概況を述べる。次に、日本とタイの交流史について触れ、現代の日タイ関係と映画『クーカム』との中でタイ人人気俳優が演じる日本兵コボリのタイ人への影響を述べる。その上で、近年公開された幾つかのタイ映画・ドラマを取り上げ、その宣伝・広告効果と訪日タイ人観光客の観光行動との関係についての考察を行うものとする。

2. コンテンツツーリズムあるいはフィルムツーリズム

「コンテンツツーリズム」とは、コンテンツの舞台である土地を訪れる観光行動の総称である³⁾。ここでいうコンテンツには、文学、映画、テレビドラマ、漫画、アニメなどが含まれる。中でも映画のロケ地を訪ねる観光の一形態は「フィルムツーリズム」(film induced tourism)と呼ばれる。例えば、映画「ローマの休日」に登場する名場面の舞台となった場所は、ローマ市内観光では不可欠の観光スポットとなっており、国内においても、尾道や富良野といった映画やテレビ番組の舞台となった地域は多くの観光客を集めている。観光地化や地域活性化を視野に入れた自治体のロケ地誘致や、映画の撮影地を名所として残すといった動きも見られている。フィルムツーリズムの1つの変形として、アニメの舞台となった地を目的とした「聖地巡礼」という観光様式も注目

されている⁴⁾。

大衆映画の流行やテレビの普及をきっかけとして、映像作品のロケ地を訪れる観光が行われるようになり、20世紀以降の日本ではメジャーな観光形態となっている。2000年には大阪市に日本初のフィルムコミッションが設立された⁵⁾。これ以降、国内各地で映画やテレビドラマ、テレビCMのロケ地誘致が盛んとなった。2000年代半ば以降、漫画やアニメの舞台と比定されるモデル地を宗教上の聖地になぞらえた「聖地巡礼」が流行し、メディアにも取り上げられるようになった⁶⁾

2005年に国土交通省総合政策局、経済産業省商務情報政策局、文化庁文化部から出された「映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査」では、「コンテンツツーリズムの根幹は、地域に「コンテンツを通して醸成された地域固有の雰囲気・イメージ」としての「物語性」「テーマ性」を付加し、その物語性を観光資源として活用することである」としている。コンテンツツーリズムに関する成功事例として、上記の調査では、①『北の国から』、②『Love Letter』、③『世界の中心で愛を叫ぶ』、④『冬のソナタ』、⑤『新撰組!』、⑥「水木しげる記念館」などが挙げられている。①では舞台となった富良野市に、最終回を迎えた2002年度の観光客数が過去最高の250万人に達した。②では1999年に韓国で公開され、大ヒットした後にロケ地の小樽市、函館市にアジアからの観光客が増え、小樽市だけをみても2001年には公開前の10倍以上の1万人を越える韓国人観光客を集めた。③では庵治町（現高松市）が映画の大ヒットを受けてウェブサイトで「ロケ地ガイド」を掲載、ガイドマップを作成、配布、東京からのバスツアーも実施され、知名度をアップした。④はいわゆる「冬ソナ」ブームを作り、ロケ地訪問ツアーが、わが国の中高齢層を中心に人気を呼び、韓国への旅行客が急増したことは記憶に新しい。韓国への日本人観光客は、2004年4月から10月までの7ヶ月間に18万7192人に増加し、これにともない韓国の観光収入も299.5億円増加した。「冬ソナ」ブームは日本国内での「冬ソナ」関連商品の販売増加、主演俳優のCM効果による商品の売り上げ拡大などを通じて、日本のマクロ経済にも好影響を与えたとされ

る。⑤ではNHKの大河ドラマ『新撰組!』の放映に伴い、2004年内で100万人の観光客増加があり、総額約170億円の効果があったとされ、⑥では境港市の「水木しげる記念館」及び妖怪のオブジェを80体配置したテーマ型シンボルロードを整備し、記念館が開館した2003年3月から12月末までの市内の観光消費額の増加分を13.7億円と推計、また間接波及費効果の合計は26.7億円に達したとしている⁷⁾。日本観光協会でも産業観光、エコツーリズム、フラワーツーリズム等とともに、コンテンツツーリズムを新たな観光と位置付けている。そしてロケ地、原作地に観光客が集まると、各自治体でも映像を地域の宣伝手段と捉えてロケ地を誘致、映画公開後はロケ地を観光資源として幅広く情報伝達することが効果的だと考えられている。

こうした「コンテンツツーリズム」あるいは「フィルムツーリズム」の効果が、佐賀県への訪日タイ人に及ぼす影響について考察する前に、日本とタイの交流の歩みとその流れの中で、タイ人による日本人男性像の形成に大きな影響を与えてきた、映画『クーカム』について触れておきたい。

3. 日タイ交流略史

日本が外交関係を結んだ東南アジアの国はタイが最初である。古くは室町時代に、那覇の貿易港でタイのアユタヤーと交易をしていた時期にまでさかのぼることができる。朝鮮の史書『高麗史』によると、1388年にタイ国王の命を奉じたと称する暹羅船の乗組員8名が、1年間日本に滞在した後、高麗王に物産を献上しようとした、という記事があり、このことは琉球の歴史書『歴代宝案』にも見られるという⁸⁾

アユタヤー時代(1351~1767年)には、アユタヤーに日本人町が造られ、徳川幕府とアユタヤーは献上品や書簡の交換を通じた交流を行っていたが、幕府の鎖国政策によって交流が中止された。しかしながら、鎖国時代にも、唐船に混じって暹羅船が1661, 64, 66, 71, 72年には年間3隻, 1677, 78, 1679~1710年には、ほぼ毎年、長崎に来航し、1723年に暹羅船来航終了まで続いたと

いわれる。長崎には、1644年に森田長助という人物が暹羅通詞に就任し（『譯司統譜』）、以後、森田姓、泉屋姓、大寺姓の通事が1855年まで存続した。

その後、1782年に成立したチャクリ朝のラーマ5世（チュラーロンコーン大王）の治世下で、明治期の日本との正式な交流が開始される。1875年、大鳥圭介（工部省）、川路寛堂（大蔵省）ら4人が、バンコクでチュラーロンコーン大王に拝謁するなどして地ならしをした後、「日暹和親通商に関する宣」（1887年）によって正式に国交が開かれることになる。1889年には「日本暹羅修好通商条約」が結ばれ、政尾藤吉（タイ法典起草委員会）、外山亀太郎（タイ農商務省養蚕局技師長）などが派遣され、また、1904年には、安井てつが助手2人とともにバンコクに赴任し、ラーチニー女学校（皇后女学校）を設立するなど、タイの近代化に寄与することになった。

1924年に日暹修好通商条約改正され、1926年に「サイゴンーバンコク」航路（大阪商船）、1928年には「日本ーバンコク」定期航路（三井船舶）が開設され、「暹羅協会」（現日タイ協会）が設立され、1933年には「暹羅実業協和会」（現バンコク日本人商工会議所）開設された。また、伊藤忠商事（1933）、三菱商事（1935）、横浜正金銀行（1936）が進出し、1930年代後半のタイは、日本にとって最大の輸出国となるなど、緊密な関係を築いていくことになる⁹⁾。太平洋戦争中には、タイは日本の同盟国として連合国軍と対峙することになり、タイには多くの日本兵が進駐することとなった。しかし、その一方で「自由タイ運動」¹⁰⁾によって連合国軍に与することもあり、遂行に貢献し、戦後、タイ王国が主権を保つことができた重要な要素のひとつとなったといわれる。

4. 『クーカム』— タイ人による日本人男性像の形成¹¹⁾

タイ人による日本イメージ形成については、さまざまな要因がある。第1に、日本企業によるイメージである。第2に、日本の文化関連商品（たとえば、芸能人、ポピュラーカルチュア、日本食など）が形成するイメージである。中でも、伝統的な日本人イメージ、特に日本人男性像の形成に関しては、映画やド

ラマで何度も放映されてきた『クーカム』（คู่กรรม 運命の相手）によるところが大きい。

「クーカム」（日本語訳：運命の相手）は、1957年にタイの女流作家トムヤンティによって書かれた小説で、日本では「メナムの残照」の名称で翻訳されており、第2次世界大戦における日本軍兵士と現地のタイ人女性の恋愛を描いている。若き日本軍将校の「コボリ」（小堀）と「自由タイ運動」との関係が疑われているタイ政府高官の娘「アンスマリン」（「太陽」の意）が主人公のこの物語はフィクションだが、主人公コボリのモデルとなったタイ国駐屯軍司令官・中村明人は実際に存在していた。トムヤンティの父は軍人で、中村のことを父から聞かされており、それを元に小説にしたとされる。小説をもとに1970年に初めてドラマ化され、1972年、1978年、1990年、2004年、2013年と6回にわたって放送され、さらには、1973年、1988年、1995年、2013年と4回も映画化もされている。ドラマ、映画のリメイクの回数を見てもそれだけタイ人に愛されている作品であるということがわかるだろう。このドラマの主人公には毎回、人気俳優やトップアイドルが起用されている。

先述したとおり、この作品が初めてドラマ化されたのは1970年で、2013年のドラマ・映画で9回目（10回目）のリメイクとなる作品だが、「クーカム」が社会現象を引き起こしたのは1990年で、タイの国民的スターであるトンチャイ・メイキンタイ（バード）が小堀に扮したときといわれる。ドラマの時間になると、バンコク名物のタイ渋滞がなくなり、町中から人が消えたと伝わるほど、タイ国民がテレビの前にかじりついていたという。それ以降、スーパースターが小堀を演じるのが定番となり、タイ人が熱狂するオーディション番組「The Star」で優勝し、若手人気ナンバー1のビー・ザ・スターが、また、2013年4月公開の映画では、「バンコク都民の選ぶ好きな男優第1位」に選ばれたナデート・クギミヤ（ベリー）が小堀を演じた。ナデートは養父が日本人であり、その姓からも日本人将校をタイ人が演じる違和感が薄められている¹²⁾。こうしたスーパースターたちが演じるコボリは、タイを侵略しに来たと思っていることから日本人に対してわがままとも言える態度をとるヒロインのアンスマ

リンに嫌われても、一途にアプローチを続ける誠実さを持ち、規則をきちんと守り、ルールや規則を破った人には非常に厳しい日本軍将校である。これは、タイ人から見た日本人のイメージと重なり、タイ人が理想とする日本人男性が表現されているといえる¹³⁾

5. 映像メディアの広告効果 — タイ人スーパースターと佐賀フィルムコミッション

以上述べてきたように、戦争中における日本人とタイ人の恋愛をテーマにしたタイの代表的に映画『ターカム』の中で、主人公の一人「コボリ」を演じたタイのスーパースターたちによって、タイ人による日本人男性への好イメージが形成されてきた。そうした中、近年、佐賀フィルムコミッションが誘致したタイ映画が連続してヒットし、これが佐賀を訪れるタイ人観光客の急増につながっている。その映画をいくつかについて概観してみよう。

(1) 『きもの秘伝』(2015年)

約8割が日本を舞台に展開するこのドラマは『ゴン・キモノ(きもの秘伝)』と題し、「伝説の未完成の着物」をめぐる2つの名家が対立する、「ロミオとジュリエット」と「七夕」をかけ合わせた現代版のラブ・ファンタジードラマである。名家の対立、主役が鶴の精霊を演じるファンタジーな要素など、タイ人が好きなドラマ要素を取り入れながらも、日本の美しい景色や着物衣装がふんだんに織り込まれた内容になっている。2014年末から北海道、飛騨高山、白川郷などがロケ地として検討されていたが、最終的に九州が選ばれた。「ビジット九州」効果への期待を寄せる佐賀県は、いち早く協力に名乗りをあげ、主人公が琴の演奏を披露するシーン(武雄)、温泉の入浴シーン(嬉野)、主人公とヒロインの仲が深まるシーン(伊万里)など、全24話のドラマ中に佐賀県のシーンが多数登場する。そのほか、北九州では主演女優が幻想的な藤園の中で着物を着て演技し、柳川では白無垢で川下りを行うシーンが撮影された。

メインキャストのほとんどが着物を身につけるシーンがあるため、タイに「正

しい着物文化」を伝えるべく、国際交流基金の協力のもと、専門の着付け師などを派遣して撮影を行っている。また、ドラマ放送開始時（2015年12月）に併せて、バンコクでの着物ファッションショーや着付け教室などに向けての計画もすすめられた。

放送はタイ地上波ゴールデンタイムで24話、12週間にわたって行われたが、主演男優が『クーカム』でコボリを演じたバード・トンチャイ氏の17年ぶりのドラマ主演ということもあり、注目の芸能ニュースとして各種テレビ・新聞メディアに大きく取り上げられた。タイでは、人気ドラマの視聴率は30%を超え、社会への影響力が大きく、九州各地の風景や街頭で撮影されたシーンがドラマ内に多数登場することで「ポスト北海道」の渡航先としての「Visit KYUSHU」への効果が期待できるという¹⁴⁾

(2) 『TIMELINE』(2014年)¹⁵⁾

佐賀県がロケ地になったタイ映画「タイムライン」も、佐賀県が撮影の舞台となっており、唐津、呼子、大川内山、祐徳稲荷神社など様々な場所で撮影され、人気若手俳優のジェームス・ジラクとトゥーイ・ジャリンポーン主演によってヒットすることになった¹⁶⁾。タイ北部でイチゴ農園を営むマットは女手ひとつでひとり息子のテーンを育ててきた。テーンが農学校に進学して農園を継いでくれることが亡夫と彼女の願いであった。しかし新しい世界に関心があるテーンは母を説得してバンコクの大学に進み、新入生歓迎会で活発で魅力的なジューンと出会い、惹かれていく。女性主人公のジューンを演じるトゥーイ・ジャリンポーンが、祐徳稲荷神社でお参りをし、呼子の朝市を散策したり、唐津くんちを見学したりするなど、佐賀県の風景や行事が随所に盛り込まれたシーンが、タイ人に受けているという¹⁷⁾。

鹿島市の祐徳稲荷神社では、多数のタイ語で書かれた絵馬も奉納され、英語、中国語、韓国語などに混じって、タイ語のおみくじも販売されていることから、タイ人観光客の多さを物語っている（写真1）（写真2）。地元商店街でも、タイ語の話し声が飛び交って大変なにぎわいになって、活気があるといわれ、タ

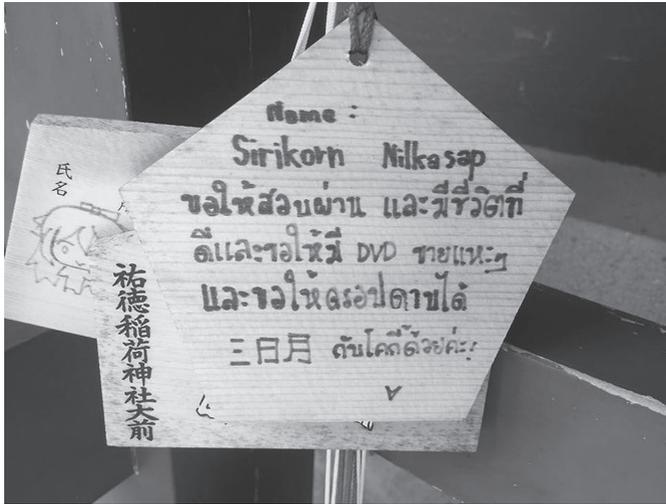


写真1 タイ語で奉納された絵馬（佐賀祐徳稲荷神社）



写真2 タイ語版もある外国語おみくじ（佐賀祐徳稲荷神社）

イ語で表記された羊かんなども販売され、タイの観光客にも喜んでもらえるように、試行錯誤されている¹⁸⁾

(3) 『SYAY — 私の愛した佐賀』 (2015年)

佐賀県が舞台のミニドラマ『STAY — 私の愛した佐賀』が、LIVE TV で2015年2月14日よりスタートし、毎週土曜日午後8時に新エピソードが公開された。出演は大ヒット映画「アイ・ファイン、サンキュー、ラブ・ユー」のサニー・スワンメーターノン、大人気ドラマ「Hormones ワイワーウン」のカウ・スパサラー、内田紳一郎、榎田さくらほか。ロケは1月に三瀬村の農家民宿や同市の嘉瀬川河川敷、武雄市の温泉、唐津市の波戸岬などで2週間に渡り行われた。

ジュック（スパサラー・タナチャート）は、一生に一度は自分の本を出版したいという夢を持っていた。そこで日本の食べ物を卒論のテーマにし、本にまとめようとしていた。最初は親友のエーンと一緒に、日本の佐賀県の農家にホームステイをして調査をする予定が、エーンが急なキャンセルをし、ひとりで行く羽目になった。その農園でジュックはミー（サニー・スワンメーターノン）という物静かなタイ人男性と出会った。ミーは3年以上日本に住んでいた。ミーはジュックの相談役になり、二人はすぐに親しくなった。そして知らず知らずのうちお互いを想い合う気持ちが芽生えてくる。甘酸っぱく、繊細なラブストーリーであり、家族の絆も描いた。観光地だけでなく、佐賀の日常的な風景の美しさもとらえた物語となっている¹⁹⁾。

6. おわりに

バンコクのスクムヴィット通りにある大型複合商業施設「Terminal 21」²⁰⁾にある1階の日本フロアにみられる日本文化の象徴は、一方で、相撲、芸妓、提灯、富士山など、いわゆる「伝統」であるが、一方で、ファッション、コスプレ、ゲームなど「現代」の日本の表象が使われている。訪日タイ人観光客の行先に

関しても、「東京」に代表されるような都会的な景色と雰囲気への憧れとは別に、心の原風景としての日本の地方の美しさへの志向といった別の関心が広がりをみせている。こうしたタイ人の志向の広がりと同様化は、バンコクにある日系旅行社に置いてある旅行パッケージ商品の多極化にも表れている²⁰。プリチャーパンヤーも指摘するように、ドラマや映画などの映像メディアの中に出てくる日本の原風景と、演じる人気スターたちとの相乗効果は、訪日タイ人の行先へ少なからず影響を与えているといえるだろう²²。

もちろん、こうした映像メディアによる広告効果だけが、訪日タイ人、特に佐賀を訪れるタイ人観光客の増加に拍車をかけているわけではない。冒頭に述べたビザの免除措置に加えて、九州はLCCの航空便が「福岡ーバンコク」線に就航し、タイからの集客の追い風になっている。LCCの搭乗客の6割以上がタイ人で、女性、家族連れ、若者などが多く見受けられるのも特徴的である。

本稿では、佐賀県を訪れるタイ人観光客が増加していることを述べ、その要因のひとつとしてドラマや映画などの映像メディアの広告効果の影響が大きいためであろうことを述べてきた。しかし、日本の地方都市を訪れるタイ人観光客の行先が佐賀だけではないことは、旅行パッケージ商品の多様化・多極化からも明らかである。この点についての考察は、今後の課題としておきたい。

注および引用・参考文献

- 1) 本稿は、文部科学省科学研究費補助金の挑戦的萌芽研究「海外企業のメディア広告がタイ文化に及ぼす影響」(研究代表者:片山隆裕)の研究補助金を得て、2015年12月と2016年8月に、タイ国バンコク都ほかで実施したフィールドワークの際に収集した資料に基づいている。誌上を借りてお礼申し上げたい。
- 2) livedoor News 2015年3月6日
- 3) 岡本亮輔 『聖地巡礼ー世界遺産からアニメの舞台まで』 中公新書 2015年
- 4) 筒井隆志 「コンテンツツーリズムの新たな方向性ー地域活性化の手法として」 『経済のプリズム』(110号) 2013年 10~24ページ
- 5) フィルム・コミッション (Film Commission) は、映画等の撮影場所誘致や撮影支援をする機関である。地方公共団体や観光協会の一部署が事務局を担当していることが多く、映画撮影などを誘致することによって地域活性化、文化振興、観光振興を図

るのが狙いとされる。

- 6) 岡本 前掲書
- 7) 増淵敏之 「コンテンツツーリズムとその現状」『地域イノベーション』（第1号）2009年 33～40ページ
- 8) 石井米雄・吉川利治 『日・タイ交流 600年史』 講談社 4～5ページ
- 9) 綾部恒雄・石井米雄（編） 『もっと知りたいタイ』 弘文堂 265～281ページ
- 10) 「自由タイ運動」とは、太平洋戦争開始から終戦までの間、タイ王国に進駐した日本軍に対する抗日情報活動で、連合国にタイ国内の重要な軍事情報を提供し、インドシナ半島における連合軍の作戦遂行に貢献した運動である。戦後、タイ王国が主権を獲得することができた大きな要因のひとつとなった。
- 11) トムヤンティ 『メナムの残照』（西野順治郎訳） 角川文庫 1978年
- 12) タイランド・ハイパーリンクス (<http://www.thaich.net/news/koogum.htm>)
- 13) 「タイの人気映画「クーカム」とそれが与える日本人男性像への多大な影響」 (<http://www.feellifer.jp>)。このほか、日本人を主人公とした映画には、『YAMADA — THE SAMURAI OF AYOTHAYA』がある。これは、アユタヤー王朝時代にタイに渡った山田長政の物語であり、アユタヤー王に仕え、日本人であるにもかかわらず、王の命を救う武士の誠が描かれている。タイの日本人村に住めなくなり、日本人の現地ニンジャ組織に追われる身となった山田長政が、現地住民に助けられ、介抱してくれた家の美女と恋に落ち、助けてくれたムエタイ集団との友情を育む。当初、日本の武道でムエタイ集団と試合をした長政は、簡単に叩きのめされ、ムエタイ修業に入る。修業した後、再度ムエタイ集団に試合を望み、今度は互角に戦う。一方ムエタイ集団も、日本の剣術を学び、双方の武道を尊敬し合うという物語である。主演の長政をタイで活動している大関正義が演じているが、大関は、日本人俳優として初めて『クーカム』のミュージカルで主役を演じている。
- 14) Dream (<http://www.dreamnews.jp/press/0000092770/>)
- 15) 2014年9月12日から21日までキャルナシティ博多ほかで開催された「アジアフォーカス・福岡国際映画祭 2014」でタイ映画『タイムライン』が上映された。
- 16) 日本でも公開された『レター — 僕を忘れないで』（2007年）の続編である。
- 17) 『TIMELINE』の nonsiie・ニムット監督は、タイ映画界のリーダー的存在で、記録的なヒットとなった『ナン・ナーク』（1999年）をはじめ、『ジャンダラ』（2001年）、『ホイール』（2002年）などが日本でも公開されている。本作は nonsiie が制作にまわった『レター — 僕を忘れないで』（2004年）の続編の趣がある。ここ数年、日本ロケを行うタイ映画が増えており、長崎県を舞台にした「H Project」（端島プロジェクト）（2013年）などが知られている。
- 18) 筆者は、2016年10月に祐徳稲荷神社、呼子、唐津などを訪れて、現地調査を実施した。
- 19) こうした作品のほか、近年では、タイ人俳優が日本人を演じるテレビドラマ『ライ

ジング・サン』がある。主演は第1部がマリオ・マウラーとテーウ・ナタボン、第2部がナデート・クギミヤ、ヤーヤー・ウツラサヤーで、2013年より千葉県などでロケが行われてきた。ロケ地の一つとなった千葉県佐原市観光協会ウェブサイトによると、このドラマは「鬼塚家と三沢家という資産家の中で起こる様々な利害と恋愛の織り成すドラマ」とある（タイランド・ハイパーリンクス <http://www.thaich.net/news/20140621c.htm>）

- 20) 「Terminal 21」は2011年に開業した大型複合商業施設で、各フロアが日本、イギリス、イタリア、フランス、アメリカなど、それぞれの国を表すコンセプトで作られており、1階フロアには「日本」の伝統と現代を象徴するさまざまな表象がちりばめられている。
- 21) 筆者は、バンコク市内にある日系旅行会社J社、H社にある旅行商品広告の資料を収集している。この資料に関する分析は、別稿に譲りたい。
- 22) プリチャーパンヤー, C. 「タイから見た日本文学」『青山語文』（第46号） 青山学院大学日本文学会 135～150 ページ